

2016年1月19日

精神疾患と東洋医学 (2)

前回取り上げました東洋医学で言うところの「内因」とは精神的な範疇のことです。

東洋医学の基本は陰陽五行説にあります。精神的な機能を現代医学的に照応させて、五つの臓の機能に分けてみたいと思います。

肺の機能は、原始的な精神機能、寒熱触覚などの原始的な知覚、新生児の条件反射など。

肝の機能は、高度な精神機能であり、感情や情緒の感覚。活動性を主とした機能

心の機能は、最も高次な中枢神経機能、意識をつかさどり、全体を統括します。

大脳の機能、記憶、判断力、言語機能など。

脾の機能は、論理的思考、計算能力などの機械的な精神機能。

腎の機能は、精神活動の最も根源的な意志のようなものをいいます。脾の機能によって精神活動が増幅されます。

以上の区分より、高度に機能化された現代の社会における精神疾患は、心の機能に最も由来します。次に続くのが肝・腎の機能です。

心の機能を表現する主な言葉について説明したいと思います。

心気不足：手足の冷え、顔色が悪いこと。

心火上炎：動悸、火照り、充血、頭痛など。

心神不寧(しんしんふねい)：不安感、記憶障害、睡眠障害など。

心腎相交：心の機能は陽で火の性質をもち、腎の機能は陰で水の性質をもつ。

反対の性質をもちますが、互いに補完し育て合う関係です。

心腎不交：心陽は下方におりて腎陽を育て、腎陰は上方に昇り心陰を供給します。

この巡りに支障がおこると、心陰が不足して心陽が亢進してしまい、睡眠障害や不安感が増長します。

うつ病に代表される精神疾患は睡眠障害から始まります。

心腎不交のように、心の機能と腎の機能がうまくいかないと、良好な睡眠を得ることができません。

古来より、肝の機能は一般的に情緒と深い関係にあるといわれていますが、ここであえて合理的に区分しますと、本能的な感性については肝の機能とし、知能を媒介した感性は心の機能として捉えたいと思います。

現代社会のストレスの多くは、本能的というよりは、高度に組織化され管理された人々の社会的な感情により生み出されたものです。

東洋医学的には、ストレスの症状の多くは肝の機能に現れますが、その根本(本治)は心の機能の失調にあると、解釈すべきではないでしょうか。